

木工研究会 木工書籍講習会

開催日時：2017年12月2日（土）13時から17時まで

会場 松本市 長野県工業技術総合センター 会議室

参加者28名

報告者 谷 進一郎

〈講師〉 須田 賢司 木工家 重要無形文化財（人間国宝）保持者

西川 栄明 ライター 編集者

吉野 崇裕 木工家

谷 進一郎

木工家が自らの制作の糧にしようと思って、古今東西の木工文化に関心をもっていても、実物を見たり触れたりする機会は限られているので、実際には木工書籍を通して学ぶ機会が多くなります。

しかし、普通の書店や図書館などで見ることのできる木工書籍は非常に少ないもので、特に若い世代の木工家にとっては、過去にどんな木工書籍があったのか、そういう情報を知ることもしかない状態か、と思います。

そこで須田賢司さんと私がそれぞれ40年以上にわたり集めてきた木工書籍の中から、私たちがどのような木工文化に関心をもって学んできたのかをお話しながら、お薦めの木工書籍を紹介する講習会を企画いたしました。

須田さんはその著書「木工藝 清雅を標に」の中でも、参考文献として木工や木工文化に関する書籍を幅広く紹介されています。

私は信州木工会木工研究会で2001年にも「木工家具の本」の講習会を実施して、日本、朝鮮、中国、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなどの木工書籍を紹介していますが、今回の講習会ではその後入手した書籍（古書が多い）も合わせて持参して紹介しました。

二人に加えて、ライター&編集者の西川栄明さんは木工関係書を手がけることが多く、そのための資料として集められた多くの蔵書の中から、紹介してもらいました。

また、吉野崇裕さんはアメリカなどでの木工経験が多いので、その方面の木工書籍を紹介してもらいました。

木工書籍といっても、所謂技法書というもの（これも多くはないのですが、）よりも、まず木工家として生きて来た、その人生に影響を受けた書籍、という観点から話を始めました。

須田さんは、自らの木工人生に影響を受けた三つの展覧会と書籍としてお話され、陶芸家・富本憲吉の作品を東京の近代美術館で見て、その著書で富本の工芸家としての生き方を知り、自分もこの様に生きたい、と影響を受けたこと。40年前の「スカンディナヴィアの工芸」展でJ・クレノフの木工家具を見て、木に対する感覚に親近感を覚えて、その著書にも感心したこと。

また父君の先生にもあたる梶田恵の影響で、朝鮮の家具に関心を持ち、「高麗李朝500展」「李朝時代木工作品集」などを見て、影響を受けたことなどをお話されました。

私は、松本で木工修業に入る前に「季刊銀花」で、松本民芸家具の職人修業のことや創業者の池田三四郎の蒐集した木工家具のこと、黒田辰秋の仕事のことなど知り、この道に深入りすることになったこと。その後、朝鮮の家具に関心を持ち、須田さんたちと数年間、東京で李朝木工研究会などを続けたことなどお話をしました。

そして、私もクレノフの作品から参考にしたことが色々ありましたが、須田さんが、クレノフの影響は今でも大きいけれど、安易に形を真似ることは気をつけたい、と作家としての矜持を話されていたのも印象に残りました。

次の話題は「正倉院の木工」についてで、歴史的に「木工」が工芸の中で重要な地位にあったのは正倉院の時代がピークとも言われていて、現代の国宝や文化財などの工芸の中で木工の地位が低いことや、明治初めに正倉院の宝物が公になった時には指物などの木工品の多くはバラバラになっていて、有名な「赤漆文櫛木御厨子」もその頃修理されたこと、この厨子を誰がどの様な道具で作られたのか、まだ不明な点が多いこと、など色々話し合いました。

その後、持参した他の本を紹介しながら、木工に関する様々な話題を話し合いました。取り上げた主な本は「木材ノ工藝的利用」「Wood and Traditional Woodworking in Japan」「木工具使用法」「職人の近代」「道具曼荼羅」「黒田辰秋 人と作品」「朝鮮の膳」「李朝時代木工作品集」等々。

さらに、須田さんはアメリカで年に6冊ほど発行される「Fine Woodworking」誌を取り寄せて、延150冊ほど手元にあるが、記事のイラストもわかりやすく、ルーター加工など参考にしている記事も多いことも紹介されていました。

日本でもこうした雑誌は欲しいけれど、それが難しいのであれば、「F.W.」誌に日本の木工家をもっと関わると良いのでは、とお話されました。

この様にご自分で木工に関して幅広く関心を持ってこられました。参加者にも木工に対する好奇心を持つことを勧められました。

休憩をはさんで、西川さんの持参された木工書籍の紹介となりました。

まず、デンマークの椅子のデザインに大きな影響を与えたオーレ・ヴァンシャーの家具史の本「MØBELKUNSTEN」。日本の本では今から約90年も前に発行された森谷延雄の「西洋美術史 古代家具篇」と石丸重治の「英国の工藝」といった貴重本。その他、家具史研究家の鍵和田務さんの本。イギリスで入手されたウィンザーチェアの参考書の数々。デンマークで入手されたウエグナーなどのデザイナーの関連書の数々。民芸関係では戦前に発行された「工藝」。木に関する参考書の数々。

西川さんは今回、蔵書の一部から、比較的希少な本を選んでくれた様ですが、西川さんは木工家具に関する幅広い様々な著作があって、これらの本を作る度にテーマに合わせて出来るだけ多くの参考書を集め、本の原稿の内容の検証などにも活用されている様ですから、一冊の本を仕上げ世に出すためには見えないところで大変な労力と時間を掛けられていることが良くわかりました。

この様にして発行された西川さんの木工書籍の中から、最近の著作「Yチェア秘密」「ウィンザーチェア大全」「樹木と木材の図鑑」「木のものづくり探訪」などを紹介され、こうした著作を切っ掛けに木工の展覧会や講習会やトークなども様々な形で行われていることなどお話をされました。

その後の話題は、私たちが昔木工関係の洋書を購入していた日本橋の「東光堂」書店のことや最近古本の入手もネットで簡単に探せる様になったことなどに及びました。

続いて、山梨の吉野さんの持参されたアメリカの木工関係書に関連してお話してくれました。吉野さんが参加されているアメリカの「The Furniture Society」は、木工家具に関する情報を共有して学習する団体ですが、情報をネットで配信するだけでなく、木工書籍として出版している。こうした活動は木工家具について社会的認知にもつながり、市場の確立も目指しているように思う、とお話されました。

日本の木工の現状を考えると、こうしたアメリカでの活動を参考にして、技術や情報の共有にとどまらず、ビジネスモデルとしてしっかり考えていく活動がこれから必要だと考えて、吉野さんは山梨で拠点を作ろうとしているとのことでした。

また続いてお話された兵庫の迎山さんの「木工家ギルド」の提案も、吉野さんと同様に木工家の仕事や活動の社会的な認知を高める活動として、考えられていました。

現役世代の木工家の方たちが、新しい展開を模索しているようで、これからの活動に期待しています。

最後に、須田さんも私も木工関係の蔵書は関心ある方がこれからは勉強できる様にしたいと考えて活動していることなどお話しして、一部販売可能な木工書籍の譲渡などをしながら、合わせて200冊ほど集まった木工書籍を参加された方たちにゆっくり見てもらった後、片付けて散会いたしました。

この講習会の講師を務めていただいた須田さん、西川さん、吉野さん、会場を提供していただいた長野県工業技術センターの皆さん、講習会で私たちが話をしている間、スマホのカメラを操作して、木工書籍をスクリーンに映してくれた賀来さん、皆様のご協力に感謝いたします。

参考までにお話した4名の紹介した木工書籍のリストも添付しておきます。

木工書籍講習会会場の様子

